SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス

No.144
1996.10.25

‖巻頭言‖
生まれ変わったゲーム理論

■第15回大学院共同セミナー
ゲーム理論の新しい展開

■業務通信

Plain living and high thinking

財団法人　大学セミナー・ハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE,INC.

生まれ変わったゲーム理論

東京大学経済学部助教授　神取道宏

ここ15年ぐらいの間に、経済学者の間でゲーム理論の研究が爆発的に進行している。特に産業組織論や公共経済学、金融理論はその内容が大幅に変わった。現在では、マクロ経済学や国際経済学、労働経済学でもこの理論の取り込みが流行していて、さらに経済史にも応用が進んできている。

ゲーム理論そのものは、新しい社会科学の数学理論として一九四四年にノイマンとモルゲンシュテルンが『ゲームの理論と経済行動』で発表した。この理論は、発表当時はたいへんな衝撃だったが、応用が試みられていく中で廃れていく。五八年にサミュエルソンらは、「ゲーム理論のできることはせいぜい経済分析にヒントを与える程度だ」と結論づけていた。

●ゲーム理論の復活

ところが八〇年代に入って、ゲーム理論は復活した。例えば経済理論の最高誌と目される『Econometrica』におけるゲーム理論に関する掲載論文は、七五年には55本中4本だったが、とうとう去年には44本の内22本になった。これはミクロ経済学のほとんどがゲーム理論に関する研究であることを示している。サミュエルソンでさえ、九一年には「今後人間が生活する上では読み書きと並んで一般的なゲーム理論の理解が必要だ」と評するように変わった。

九四年にはついにナッシュ、ゼルテン、ハーサニーの3人のゲーム理論家がノーベル経済学賞に選ばれた。その理由は、彼らがノイマンらのゲーム理論の内容を変え、経済学を大きく変化させたからだ。ここでは、そのゲーム理論の変貌ぶりを説明する。

●ゼロサム・ゲームの限界

ゲーム理論は誕生から現在に至るまでに四つのハードルを越えた。第一のハードルは、社会科学者に戦略的思考の重要性を納得させることで、これはゲーム理論の誕生によりほぼ達成された。当時の経済学は、完全競争を仮定した需要と供給の分析が主流だった。そして、一定の市場価格の下で効用や利潤の最大化を割り出すために数理計画法や最適制御理論といった出来あいの数学を借りていた。これに対して、ノイマンらは完全競争の世界を離れて戦略の読み合いを直接取り扱う、新しい社会科学の基礎となる数学理論を「ゲーム」として定式化した。その問題提起は画期的で大きな反響を呼んだ。

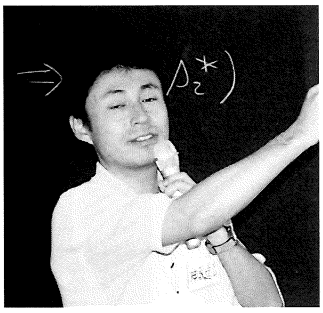
しかし、ノイマンらは2人ゼロ和ゲームしか解けなかったため、その解答は結果として二つの大きな混乱を学界に及ぼした。それらが第二、第三のハードルになった。一つは、一般状況では人が協調と競争のどちらを選ぶのかわからないと言ったこと。一般的には人が自分勝手に行動すると全体の利益が小さくなることがあるので、協調か競争かという選択が生じる。しかし、2人ゼロ和ゲームは常に二人の利得をたすとゼロ、簡単にいうと一方が得すると必ず同じ分だけ相手が損しているというゲーム。つまり、取るか取られるかといった協調の可能性がない特殊状況しか解けなかったわけである。

もう一つは、合理的な人はかなり複雑なやり方で相手の出方を読むといったこと。彼らの提案した解の概念は常に相手が自分の出方の変化に最適（自分にとって最悪）に反応すると仮定するミニマックス解であり、これで解けるものは2人ゼロ和ゲームだけなのである。2人ゼロ和しか解けなかったこと、またそれしか解けないということは、ゲーム理論の廃れた理由でありノイマンらの失敗だった。

●競争・協調の峻別と統一――非協力ゲーム

第二のハードル、競争か協調かという問題にはナッシュが、協調できるケースとできないケースを協力ゲームと非協力ゲームに区別して理論的な手がかりを与えた。囚人のジレンマでいうと、協力ゲームは事前に拘束力のある契約を書けるので黙秘し最善の減刑を謀るケース、非協力ゲームは互いに自分の利益だけを考えて自白するケースとなった。そして、協力ゲームでは「みんなが納得する契約とは何か」をいくつかの公理をおいて考えるといった分析方法になり、他方の非協力ゲームでは相手の出方をどう読むかが最大の問題になる。

さらにナッシュは、協力ゲームの研究を深めるには、契約を結ぶまでの交渉や契約を結んだ後の行動を非協力ゲームで分析することが必要であるという、いわゆる「ナッシュ・プログラム」を提案する。協力ゲームでも契約を結ぶまでは拘束力がないので、全体は非協力ゲームになるからである。こうしてゲーム理論は、非協力ゲームが理論の基礎になって第二のハードルを越えた。



かんどり　みちひろ
1959年生まれ。専門は理論経済学。論文に"Learning,Mutation,and Long Run Equilibria in Games","Social Norms and Community Enforcement"等がある。

●合理的な読みの発見―ナッシュ均衡

そこで、第三のハードルは相手の出方をどう読むかという戦略である。これに関する理論は昔からいろいろあって、不完全競争の分析ではクールノー、シュタッケルベルグ、屈折需要といった解が代表的だ。そして、八〇年頃まで経済学の教科書では、これらのうちどれが正しいのかわからないとされていた。なぜなら自分の行動に対する相手の対応の予想にはいろいろなものがありえるので、その予想が変わると解も変わってしまうということである。

これに対して現在のゲーム理論は、いろいろあるのは解ではなくて実はルールの方だと考える。一方が出方を変えたときの他方の反応は、誰がどんなタイミングで何を観察することができ、誰がどんなタイミングでどう動くのかというゲームのルールに従って考えれば一つしかないはずだ。こうした見方のもとになっているのがクーンが五三年に発表した展開型というゲームのルールの表現法である。

ナッシュは、さらにナッシュ均衡という概念を用いて相手の出方の読みを明解に説明した。まず全ての人が同時に戦略を選ぶ場合は、自分がこっそりと手を変えても相手にはそれが見えないので、人々は相手の行動を一定と見て最適な手を選ぶことになる。このように、お互いが相手の一定の行動に対して最適な手を取り合っている状態をナッシュ均衡という。ナッシュは有限個の戦略をもつどんなゲームにもナッシュ均衡があることを示した。

このナッシュ均衡がなぜゲームの解といえるかというと、試行錯誤のおちついた先という解釈と、口約束が守られる条件という解釈がある。例えば、道を歩くというゲームには「全員が右側を歩く」のと「左側を歩く」という二つのナッシュ均衡があるが、右側通行は長い間社会の習慣として自然に出来上がってきたとも考えられるし、また「このセミナー・ハウスでは左側通行にしよう」と口約束をすればみんながそれを守るなら誰でもそれに従う。このナッシュ均衡という解の概念はミニマックス解とちがってどんなゲームにも当てはまるのでゲーム理論を飛躍的に発展させた。

●新しい分野を広げたゲーム理論

さらにゼルテンは、部分ゲーム完全均衡という概念を使ってナッシュ均衡を時間を含んだゲームに当てはめることを可能にした。人は予想できるあらゆる展開への対応を詳細に決めた行動計画をゲームの開始時点で同時に選んでいると考えると、時間を含んだゲームも同時手番のゲームと考えられる。しかし、そこでナッシュ均衡をむやみに使ってしまうと信頼性のうすいものが混じってしまうことをゼルテンは発見した。

そこで彼は、時間を通じたゲーム全体を構成する小さなゲームを部分ゲームと呼んで、戦略の信頼度をこの部分ゲームのそれぞれでナッシュ均衡が成立しているかどうかでチェックすることを提案した。部分ゲームの全てがナッシュ均衡であれば部分ゲーム完全均衡といい、最も信頼できる戦略になる。こうしてナッシュとゼルテンが相手の出方を読む戦略の基本的な理論を作った。

第四のハードルは、ゲーム理論の中にどう私的情報を取り込むかである。二人が同時にある絵の入札価格を封筒に入れて競る競争入札の価格決定を例にとると、各人の自分にとっての絵の価値は自分にしかわからない私的情報だ。ハーサニーは六七年から六八年にかけての一連の論文で、こうしたケースでは①各人の絵の価値が一定の確率分布から出ていて、その分布を二人ともよく知っていると仮定し、また②自分の絵の価値と自分の入札額の対応を関数として定義すれば、通常のナッシュ均衡を使ってうまく分析できることを発見した。

このような私的情報を含む問題をナッシュ均衡の分析方法に帰着させる方法は、ベイジアン・ナッシュ均衡といい、オークションのような情報の非対称性の問題が経済学で初めて分析可能になったのである。

こうしてゲーム理論は、ナッシュ均衡によって理論的に統一され、時間と情報が含まれる問題にも適用できるように生まれ変わった。七〇年代初めには既にブームの素地ができていたのだが、この変化が認知されるまでには長い時間がかかった。

そして、その変化が認知されてブームになった現在のゲーム理論は、現実に適応する際の多くの課題を解くために、情報が非対称的なときの契約理論、交渉のプロセスを分析するための交渉理論、それから最適な制度や経済のルールを設計するためのメカニズム・デザイン理論、実験経済学といった新しい分野を経済学に生み出してさらに発展している。

（文責・編集者）

ゲーム理論の新しい展開

▼主題解題

東京大学大学院教育学研究科教授　佐伯　胖氏

▼講義と演習指導

A　生まれ変わったゲーム理論

東京大学経済学部助教授　神取道宏氏

B　動物行動の進化におけるゲーム的状況とその解決

専修大学法学部教授　長谷川真理子氏

C　包括適応度と進化的安定戦略―最近の展開―

京都大学生態学研究センター教授　山村則男氏

D　社会的ジレンマ研究の新しい動向

北海道大学文学部教授　山岸俊男氏

E　社会的マッチングの現実と理論

群馬大学社会情報学部助教授　富山慶典氏

【運営委員】

東京大学大学院教育学研究科教授　佐伯　胖氏

専修大学法学部教授　長谷川真理子氏

大妻女子大学社会情報学部教授　野崎昭弘氏

【参加状況】 65名22校（内女子11名）

東京（12）、京都（7）、早稲田（6）、一橋・北海道・慶應義塾（各5）東京工業（3）、東京理科・学習院（各2）、東京学芸・東京医科歯科・東京農工・筑波・神戸・奈良女子・中央・青山学院・法政・日本・上智・創価・防衛（各1）、その他（5）

◆

最近、「ゲーム理論がおもしろくなってきた」という。「ウッソー！」と言ってしまいそうになる人も多いだろう。だってアレは一九五〇年代の初頭にフォン・ノイマンとモルゲンシュテルンによって人間の合理的な経済行動のモデルとして定式化されて以来、いろいろな発展、応用があったものの、七〇年代の後半にはもう理論的にはその限界が明らかになり、「終わって」しまったはずじゃなかったのか。あるいは七〇年代から爆発的に発展してきたコンピュータ科学と認知科学の広がりの陰で文字どおり「下火になっていった」はずではないのか。そもそも「認知科学の父」であるH・A・サイモンは、ゲーム理論が想定する超・合理性を人間行動のモデルにすることへの反発から、人間の情報処理過程に関する「ヒューリスティックス」の重要性を強調し、それが今日の人工知能研究や認知科学の発展を産み出してきた――こういう「伝説」を固く信じてきた認知科学者には「ゲーム理論」などという言葉は、まさに「過去の亡霊」としか思えない。

ところが、ゲーム理論の「ほんとうにおもしろい」展開は、実は八〇年以降にあるようだ。とくにハーサニーとゼルテンによって展開されたナッシュ均衡分析は、八〇年代の初頭に見られたさまざまな「解」の提唱とそれらの矛盾や限界の指摘という混沌をくぐりぬけて、ゲーム理論に新しい統一理論を産み出してきた。

さらに、メイナード・スミスやドーキンスらの紹介によって、生物の自然選択の安定化のモデルとしてゲーム理論の応用が広く知れ渡り、動物の進化、動物の集団行動のモデルとしての発展はめざましく、まさに生物学の新しいパラダイムになりつつある。同様に、数理社会学や実験心理学でも、七〇年代の「囚人ジレンマ・ゲーム」の実験を発展させ、さまざまな現実的な相互交渉の場面に即したモデルの提唱、それらの実験的検証への展開があり、こちらもきわめて「おもしろく」なってきている。

そこで数理経済学、数理社会学、行動生態学、数理生物学、社会心理学の分野でゲーム理論の展開で活躍されておられる第一人者たちを講師にお願いし、それぞれの分野でのゲーム理論の展開として「おもしろくなってきたこと」を講義してもらい、参加者共々相互に交流し合いながら今後の「もっとおもしろくなるゲーム理論」の方向をさぐりだそうというのが、本セミナーの企画のねらいであった。

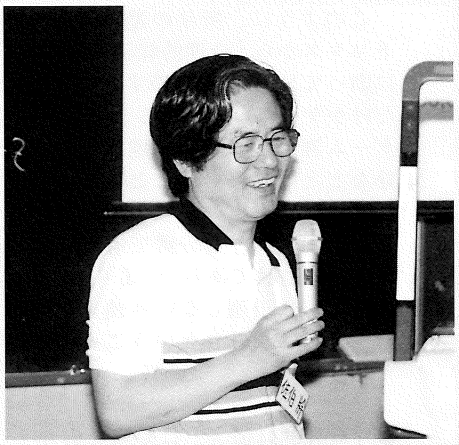
ここでは、本企画の中心人物である佐伯胖教授にセミナーを総括してもらい、さらに参加者のレポートを掲載し報告に代えたい。

セミナーの講師陣――前列左より野崎・佐伯・岡（館長）・長谷川・山村、後列左より神取・富山・山岸の各氏（ようこそ広場にて）

人間科学・社会科学の新しいパラダイムへ

―大学院共同セミナーを企画して―

東京大学大学院教育学研究科教授　佐伯　胖



このセミナーは予想をはるかに超える参加者を得て、熱気あふれる討論が行なわれた。参加者の専門領域は経済学だけでなく、哲学、心理学、社会学、国際関係論、法学、理学、工学など多岐にわたっており、領域の違いを越えて、人間研究、社会研究の新しいパラダイムの胎動を感じさせる、まさに「歴史的」な出来事だった。セミナー後、ただちに電子ネット上に参加者たちのメーリング・リストがつくられ、ほぼ一ヵ月経った現在でも盛んに電子メールでの意見交換が続いている。

§　§　§

企画の段階では、実は企画者自身はそれほどスゴイことになるとは予想もしていなかった。ただ、最近「ゲーム理論」の話が「妙に盛んになってきている」こと、「何か、八〇年以降に大きく展開してきているらしい」こと、「経済学だけでなく、生物学の方でも重要視されてきているらしい」という程度の認識で発案したのだが、運営委員の長谷川真理子氏から、進化遺伝学、動物行動学の領域でもゲーム理論による大変重要なパラダイム転換が起こっているという話が入り、さらに数学者の野崎昭弘氏も興味を示したため、あっと言う間に決まってしまったというのが実状である。

いざ具体的な企画ということになって、あれこれ調べるにつれ、これはタダゴトではないということがしだいにわかってきた。ただ、講師の人選にはほとんど苦労がなかった。ある程度問題領域がきまった段階で、誰に来てもらおうかと人にたずねると、「それならアノ人にお願いするしかない」という人がほぼ一致していたのである。その結果、数理経済学からは神取道宏氏、数理社会学から富山慶典氏、数理生物学からは山村則男氏、行動生態学からは長谷川真理子氏、社会心理学からは山岸俊男氏という申し分のない講師陣となったのである。

§　§　§

セミナー初日は、まず佐伯の主旨説明のあと、富山氏のリードのもとに、「ゲームを体験しよう」ということで、参加者全員に四つのゲームを「体験」してもらい、さまざまな行為選択にあたっての思考過程、根拠づけなどについて討論した。夕食後、神取氏は、経済学におけるゲーム理論の展開を歴史的に展望し、ナッシュ均衡を中心にして八〇年以降にはゼルテンの部分ゲーム完全均衡、ハーサニーのベイジアン・ナッシュ均衡へ展開することによって応用範囲が格段に広がっていったことを、さまざまなエピソードを交じえて解説した。

講義が終了するや否や、間髪を入れずに参加者から質問の手がいっせいに挙がるのである。こういうことは、わが国の学会や研究会ではめったに見られない光景である。質問やコメントはいずれも鋭く問題の核心をついたものであり、司会者は討論を「打ち切る」のに大変苦労した。ちなみに、あとの討論がこのように活発だったのは、セミナーのすべての講義に対してまったく変わりはなかった。

§　§　§

二日目は、まず長谷川氏が数々のスライドを用いて動物行動にみられる闘争ゲーム、協力ゲームの実態を示し、また、生物界に見られる互恵的利他行動は遺伝子のゲームから導かれることなどを説明した。続いて山村氏は遺伝子の進化ゲームの理論的解説を行ない、メイナード・スミスの進化的安定戦略、ハミルトンの包括適応などの概念の解説から、進化生態学の新しいパラダイムの発展を展望した。

二日目の午後は、山岸氏がゲームや社会的ジレンマについての実験社会心理学的研究を解説し、利己的利他主義や、「とりあえず、まずは他人を信頼する」ことが有利に働くような社会関係として、対戦相手を自由に選択できる「選択的プレイ」パラダイムがあることを示した。そのほか、価値や感情の文化的形成過程などについてもゲーム論的分析が有効であることを示した。

夕食後は、富山氏が米国における医療インターンの病院就職についての一九四五年からの歴史的展開と制度改革、とくにNIMP（National Intern Matching Program）の導入とその効果について、社会的マッチング・ゲームの理論から詳細な分析を行なった。これらは、現実社会で慣例的に行なわれている事実やその歴史的展開を、マッチング・ゲームの理論を用いて分析し、選択の合理性についての診断ができることを具体的に示したものであった。

§　§　§

三日目の午前中は参加学生の司会による総括討論であったが、これが実に活発で、多種多様な意見が出され、参加者同士の激論が生まれたり、問題意識がぶつかりあったりもした。振り返って、企画としてはまずは成功したと思われる。ただ、ゲーム理論の社会的適用に関しては、社会倫理や「公正」をめぐる議論が本来入るべきであったのだが、日数の制約から省かざるをえなかったのが心残りではある。

参加者のレポートから

ゲーム理論への誤解を解く

北海道大学大学院文学研究科博士課程
大坪庸介

私がこれまでゲーム理論を用いた多くの研究に対して持っていたイメージは、「現実と対応しない、妥当性のない分析をしているなあ」といったものであった。しかし、このようなイメージは、ゲーム理論が現実の問題に適用され、その問題の成り行きを予測するために用いられる言語だと私が勝手に解釈していたから生じたものであった。今回のセミナーに参加して、ゲーム理論とは、現実を記述するための言語ではなく、分析をするための言語（数学）であるということがわかったのである。

◆「予測」とは？

私がゲーム理論に期待していたのは、日米貿易摩擦などの複数の当事者（国）が関わるコンフリクトの行方を、各当事者の選好構造を明らかにして分析することで完全に予測できるということであった。しかし、このような意味での「予測」は、他のいかなる分野でも不可能なのではないだろうか。

例えば、私が適当に投げたボールの行方を物理学で厳密に予測することができるだろうか。そのような予測をするために特定しなければならないパラメータ（私がどのように力を加えたか、どのような向きに投げたのか、投げた場所の地形はどうか、風向きは、等々）は、まさに無限に近く、それを全て取り込んで予測を行なうことは不可能である。結局、物理学もこんな身近な現象の成り行きを厳密に予測することはできないのである。

これに対して、物理学者達は、それは「予測」の意味を取り違えていると反論するだろう。例えば、私がボールにかけた力がボールにいかなる影響を与えるのか、投げた角度がボールの行方にいかなる影響を与えるのか等々、物理学者は単独のパラメータがボールの動きにいかなる影響を与えるかというレベルでは予測を行なうことができる。そうすると今度は、ゲーム理論にはそれもできないじゃないかという批判が浴びせられるかもしれない。しかし、このような批判が生じる可能性があることこそ、ゲーム理論がひどく誤解されていることの証拠である。

◆ゲーム理論と予測

この批判が誤解にもとづくものであることを示すために、まず、物理学を用いて何かを予測する時にどういう手続きが取られるかを考えてみる。例えば、ボールを投げ出した角度からボールの動きを予測する場合には、①ボールの投げ出した角度を測定し、②その測定値を「～の法則」、「～の定理」などの名前を持つ式に代入し、③計算することになる。

このような予測の手続きを考えたときに、ゲーム理論は①～③いずれの段階で用いられるものだろうか。ゲーム理論の応用研究を概観すると、直観的にはそれぞれのステップが以下の作業に対応しているように見える。①各プレイヤーの設定、各プレイヤーの選好構造の特定。これは単なる測定であり、ゲーム理論の範疇ではない。②先に測定した各プレイヤーの選好構造などからゲームのマトリクスを作成する。③Nash均衡を探す。

それでは、②の手続きは物理学のそれと対応しているかをもう一度検討してみよう。物理学が②で行なうのは、得られたデータを実験的観察から導かれた法則（それを方程式で表したもの）に代入することであり、それにより未知の変数を求めることができる。これに対して、ゲーム理論での②は、単に測定データをゲーム理論のフォーマットに直しているだけであるから、明らかに対応していない。それでは、ゲーム理論にとっての「～の法則」は何か？　それは「合理的経済人の法則」とでも言うべきものである。これは実験観察により導かれたものではないが、ゲーム理論はこの法則の上にのって、Nash均衡を計算しているのである。

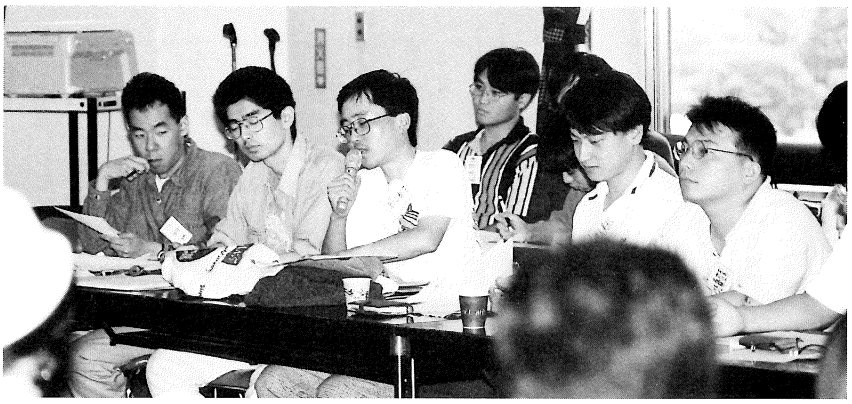
このように、所与の選好構造のマトリクスから「合理的経済人の法則」に則ってNash均衡を探すという部分だけがゲーム理論であると考えると、ゲーム理論の大雑把な理解は、微積分などと同等ということになる。それ自体は、現実の事象の何も予測はしないが、様々な分野で有効に使われている道具である。つまり、ゲーム理論は何も予測しない＝使えないという批判は的外れということになろう。

◆「合理的経済人」は妥当なのか？

しかし、ゲーム理論に問題点がない訳ではない。それは選好の測定と人間の行動原理としていかなる法則を用いるかということである。つまり、選好の測定は妥当に行なわれているのか、その選好に沿って人々は本当に合理的に行動するのかという問題である。

ゲーム理論は計算の単なるやり方であるから、その背後にある定理が妥当でなければ、妥当な計算結果を導けるはずはないが、果たして、ゲーム理論が用いている「合理的経済人」の法則はどの程度妥当なものなのだろうか。少なくとも、我々の日常的な経験からこの仮定に疑問符が付けられる場合は多い。

しかし、この点の検証は手つかずのまま残されてきている。今後ゲーム理論がもっと有効な道具として、社会科学の諸分野で用いられていくためには、この仮定の検証が進められる必要性があるのではないだろうか。つまり、人間の行動原理がどのようなものかという問題、そしてそれを背後から規定する選好という概念変数をいかにして測定するかという問題に対して、今こそ社会科学全体が一丸となって取り組む時なのではないだろうか。



「もっとおもしろくなるゲーム理論」をめぐって白熱した討論を展開する参加者たち――大学院セミナー館にて

平成8年度 諸規程改正検討作業部会

●第5回'96年7月30日、第6回'96年8月14日／当セミナー・ハウス

（委員）宇野重昭、（法人）佐野博敏理事長、岡宏子館長・専務理事

●各回の主な議題

ハウス就業規則・同附則改正部分の再点検・確認。

平成8年度 第4回交友館委員会

'96年7月30日／当セミナー・ハウス

（委員）宇野重昭、（法人）佐野博敏理事長、岡宏子館長・専務理事

●主な議題

交友館の運営方針の再検討。

長期セミナー館の宿泊棟も冷房化

―6月初旬に「施設整備期間」―

6月3～5日に設けられた本年度の「施設整備期間」では、例年の施設・設備の諸点検・整備に加え、①井戸さらい（水中ポンプのオーバーホールを含む）、②サービス・センター浴室等のための大型給湯タンクの設置、③食堂ホール内エアコンのうちの一基の更新、などの工事が行なわれた。

また、これに引き続いて、長期セミナー館宿泊棟A・B・Cと教師室に計10基のエアコンを設置する工事が実施された。これまで同館内のクーラーの設備は胡堂セミナー室だけに限られていたが、これが全館に広がったことになり、早速この夏の利用者に喜ばれた。これにより、当ハウスの宿泊室は山小屋「ユニット・ハウス」以外すべて冷房が可能となった。

平成8年度 第1回大学教員研修プログラム委員会

'96年7月1日／アイビーホール

【出席者】絹川正吉、中田良平、山内正平、亀山純生、建部正義、原一雄、福田一郎、宮腰賢、蝋山道雄、丹羽泉

【ハウス側】岡館長ほか企画室スタッフ3名

●委員長の選出および副委員長の指名、平成7年度大学改革推進等経費の実施報告、平成8年度大学改革推進等経費の要求書、第12回大学教員研修プログラムの準備状況、第12回大学教員研修プログラムの運営、平成8年度の事業計画、他。

平成8年度 大学教員研修プログラム委員

（就任順、○印は新任、敬称略）

〈委員長〉

絹川正吉　国際基督教大学教授（数学）

〈副委員長〉

原　一雄　亜細亜大学教養部教授（生理心理学）

福田一郎　東京女子大学文理学部教授（遺伝学）

〈委員〉

井下　理　慶応義塾大学総合政策学部教授（社会心理学）

亀山純生　東京農工大学農学部教授（倫理学）

佐々木一也　立教大学文学部助教授（哲学）

建部正義　中央大学商学部教授（金融論）

中田良平　電気通信大学電気通信学部教授（電子工学）

宮腰　賢　東京学芸大学教育学部教授（国語学）

山内正平　千葉大学園芸学部教授（西洋文化史）

蝋山道雄　上智大学外国語学部教授（国際政治）

小林志郎　東京学芸大学教育学部教授（演劇学）

○丹羽　泉　東京外国語大学外国語学部助教授（宗教社会学）

千人会

'96年6月～8月

◆ご入会ありがとうございました

◇出光直樹殿・桜美林大学大学院生／C

▼会員数＝一、四二七名

◆会費ありがとうございました

長岩寛、長田洋子、藤井耕一、宮川彰、今堀和友、古畑和孝、野沢浩、村瀬旻、堀部政男、島田淳子、佐藤進、安宅光雄、犬塚博、江沢洋、片岡清子、北野美枝子、橋口英俊、柳下勇、小畠守生、中山昌、二谷貞夫、奥村敏恵、竹内喜代司、嶺哲之助、阿久津喜弘、中山勝博、千野熊男、大内力、佐久間まゆみ、原田富士雄、宅間宏、逸見謙三、秀村欣二、高橋勇悦、木村敦、伏見康治、西川治、阿部斉、松尾浩也、深海博明、児玉久雄、金子晃、近藤正夫、松崎奈岐、松崎義徳、石井明、栗林恒雄、加藤秀俊、鳥海俊宏、笹森健、川添利幸、猪瀬尚志、見田宗介、田中未来、和田英一、児玉昭太郎、西成典子、石川信男、臼井久和、田中裕、吉田幸弘、林泰造、長清子、北原和夫、向坊隆、詫摩武俊、中野スミ子、辻達也、松平文朗、福山直美、永井裕、長浜洋一、小西悟、讃岐和家、鈴木務、三橋文雄、木村敏美、慶谷伸代、山西貞、入江和生、中村浩三、綿引二郎、林ひろみ、石井進、鈴木達雄、朝日信夫、厚東偉介、弦田実、藤平重雄、松尾秀雄、島田外志夫、古関彰一、黒田道雄、石川達雄、岡宏子、簗田長世、岡沢憲芙、松島恵、中嶋嶺雄、金谷憲、吉田美穂子、川原啓美、橋本智、布施涛雄、柏木恵子、奥田夏子、角瀬保雄、福井正紀、米村貞蔵、山口重克、三宅彰、小川信子、大熊徹、中島文夫、古本捷治、村田一也、西村敏男、鈴木成文、井早康正、中村幸安、千羽喜代子、藤原鎮男、中山光雄、柴田誠、森川八洲男、小池滋、田島恵児、村田全、芥川龍男、山本茂、原島幸太郎、五十嵐武士、梅沢豊、十代田知三、浅井邦二、原誠、大野澄子、桐澤潔、大蔵隆雄、滝幸三郎、太田善麿、田村恭、志賀英、渡辺昭夫、新井勝紘、鶴野省三、船山信子、伊藤一郎、市川博、窪田富男、本間正人、寺川國秀、長内了、國岡昭夫、米山弘、福島正久、小倉充夫、山本武彦、鈴木一道、大福族生、宮川俊彦、荻原洋太郎、吉松藤子、太幡祐己、宮野三郎、田中弥寿雄（敬称略）

おたより

●満69歳を迎え妻と二人恙なく過ごして居ります。日頃は相変わらず俳句三昧の日々を送って居ります。セミナー・ハウス内の「やぶれ傘」の群生地をふと想い出すこの頃です。

（嶺哲之助）

●勉強する心の波、貴き者が成長する場としてセミナー・ハウスの発展を祈ります。

（早稲田大学職員・中山勝博）

●急速な大学の変革の中での大学現職教員の方々の研修会・懇談会・セミナーの成果をOBとして深く啓発されていますし、セミナー・ハウスの役割が益々高められつつあるのを実感しています。

（東京大学名誉教授・秀村欣二）

●お陰様で無事に65歳の誕生日を迎えることができました。溢れるような初夏の緑の中で、未来を夢見て議論をするためにセミナー・ハウスに集う若者たちの姿を想像しつつ。
（中央大学教授・原田富士雄）

●学芸大を定年退官し、続けて新潟国際情報大学（新設）に勤務しています。小さい大学ですが、学生と楽しくやっています。
（松崎奈岐）

●故あって27年間勤めました学会事務局を3月31日付でやめました。無職の人生を進んでいますが、資格はありませんが資料館等へ50歳の身で勤めたいと願っている近況です。
（猪瀬尚志）

●私もとうとう古稀を迎えました。この機会に感謝を込めて、今まで撮り続けたハウスのスライドを少々寄贈させていただきます。
（東京都立立川短期大学名誉教授・吉田幸弘）

●3月に名古屋市の金城学院大学での勤務を終えて三鷹に帰ってきました。4月以降相模原市の和泉短期大学に勤務しています。そのうち参上できることを心から楽しみにしています。
（讃岐和家）

●去る3月末日で35年間勤務しました国際基督教大学を、特任教授の任期満了で退職し、名誉教授となりました。4月以降は未だやり残したことの片付けに追われています。幸いに健康には恵まれていますので、今後の人生を有意義に過ごしたいと願っています。
（三宅彰）

●ご恩寵のもと、教会への奉仕、芸術への研鑽、洋蘭の栽培にすき間なく日を送っています。自然科学からはずい分遠ざかりましたが、国際会議をひとつお世話し、来る8月には訪露いたします。セミナー・ハウスの新しい進路開拓をお祈りします。
（電気通信大学名誉教授・井早康正）

●申し遅れましたが桃山学院大、一九九四年春を以て定年退職、悠々自適でお訪ねしたいのですが、在任中の不心得のため、未刊の書物三四、未完の論文も三篇で、窮々自適であります。その内、伺いたく存じます。（村田全）

●調査旅行に出ていまして、いつの間にか古稀の日を迎えていました。忙しいのも幸せと思っています。
（法政大学教授・芥川龍男）

●また馬齢を重ねてしまいました。貧者の一灯をお送りします。今年の3月末で東京外国語大学を定年退職し、4月からは八王子市の拓殖大学外国語学部に移りました。セミナー・ハウスの近くですが、残念ながら拓殖大は会員校ではないみたいですね。
（原誠）

出会い

一九九六年七月三一日　小西　悟

八王子のセミナー・ハウスは不思議な世界
忘れえぬ数々の出会いがあった
館長・岡宏子先生
理事長・佐野博敏先生
専務理事補佐・綿引二郎さん
フロントのみなさん
職員のみなさん
日本女子大元学長上代たの先生
ゆかりの池の金魚と白雲木
その木を植えた庭師さん
根元に水をかける
附属高校の阿部洋子先生
そして先生をかこむ女生徒たち
その他にも
折にふれて同席したあの人、この人…

この出会いは何だろう
どうしてこうも彩濃い影を
瞼の裏に残すのだろう

ここを一時間と離れていない
東京の街へ出れば
恒河の砂の粒ほどの人間が
押し合い、もみ合い、ひしめき合い
ぶつかり合いながら
一瞬のうちにすれ違い
また去ってゆき
たった一つの面影さえ
残しもせず過ぎゆくものを
ここ八王子下柚木の
青葉をくぐる微風の
雑木林の中に立つ
簡素な山の学び舎には
心のひだの触れ合える
ほんとうの
人と人の出会いがある
六十路を越えて久しい身には
大自然の摂理のこの摩訶不可思議が
ありがたく
愛しく
そして哀しくもある

小西悟氏は東京都立大学名誉教授（ドイツ文学）。千人会員。6～8月に研究と執筆の個人利用で計44泊され、その間他のグループの方々との交流を楽しまれた。写真は、日本女子大学附属高校のセミナー30周年記念の植樹祭に立ち合われる小西先生（右端）（'96.6.22／第6群「上代池」横）

寄贈図書

'96年6月～8月

『順天堂史（下巻）』　学校法人順天堂殿
『書斎の窓』　有斐閣殿
『純女学徒隊殉難の記録』　純心女子学園殿
『経済システムの比較制度分析』　東京大学出版会殿
『西鶴世代との対話―歴史と文学をつなぐ』　荒川有史殿
『HIBAKUSHA』　小西悟殿

寄付

'96年6月～8月

〈一般寄付金〉
一〇、〇〇〇円＝国際基督教大学心理学研究室殿
一四、〇〇〇円＝東京理科大学・大澤綱一郎ゼミ殿

〈植樹〉
白雲木一株＝日本女子大学附属高等学校殿

〈現物〉
丸太（足場用）50本＝新日本建築家協会殿

業／務／通／信

'96年6・7・8月の合宿研修から

日本国際連合学生連盟「'96夏季全国セミナー」最終日の全体集会――全国14大学からの134名が熱心な討論を繰り広げた（'96.8.20／講堂）

●実を結ぶ他大学ゼミとの交流

大学間の垣根を越えた、文字通りインター・ユニバーシティの生活と研究の交流がさまざまな形と規模で展開されている。この夏季三ヵ月間だけでも、ハウス主催の大学院共同セミナー、24年目の十大学合同セミナー。生物物理若手の会、数論セミナー、光通信研究会などの常連グループ。そして初利用で帯広・岩手・岐阜・東京農工各大学からなる「大学院連合獣医学研究科」の特別講義――などを挙げることができる。

一人の教師を介して、二つのゼミがこの丘で合流し、合宿の効果を高めている例も増えた。学生たちは他大学ゼミとの新たな接触と刺激のなかで、人間的にも学問的にも相互に〝開かれた〟体験を持つ。7月下旬に夏休みを利用して行なわれた東洋英和女学院大学と東京大学の二つのゼミの合同合宿もその一つで、前者の社会科学部・逸見謙三教授（前東京大学教授）が、発展途上国問題を共通の研究課題とする後者の農学部・藤田夏樹教授に働きかけて、実現をみたものである。逸見教授はこれまでにも国際基督教大学や中央大学のゼミと合同合宿をされ、大学間交流の実を上げてこられた。「わたしたちの合宿」（下掲）で同教授からこの夏の一泊二日をご紹介いただいた。

●短期留学の事前オリエンテーション

大学がアレンジする海外への「短期留学プログラム」が盛んである。そして、その国際交流の体験をより有益なものとするための事前研修の合宿がハウスで行なわれている。たとえば、中央大学は毎夏カールトン大学とエクス・マルセイユ大学に各30名前後の学生を派遣し、それに向けての準備教育の合宿を実施して十余年になる。

成蹊大学のプログラムは①北京大学②ゴンザガ大学③エディンバラ大学（以上夏期）④アメリカン大学⑤ケンブリッジ大学（以上春期）の五つ。このうち①の26名と②の17名が、今年は6月中旬の同じ週末にオリエンテーションを実施した。両グループがそれぞれの日程を進めるなか、「懇親会を兼ねた食事会」といった合同のプログラムも組んで双方の教師・学生が交流する機会を持った。この合宿で終始学生たちと一体となってお世話に当たっておられたのが国際交流センターの担当者・松尾隆さん。ご自身もこの夏北京大学に同行されるという。「私の国際交流」（次頁）に一文をお寄せいただいた。

●恒例丸太使用の日米建築学セミナー

この夏も多様な国際交流・国際理解の

わたしたちの合宿

他大学ゼミとの交流の楽しさ

東洋英和女学院大学教授　逸見謙三

東洋英和女学院大学・東京大学両ゼミの合同合宿を終えて――中央の逸見謙三教授をはさんで右が藤田夏樹教授、左が原洋之介教授（'96.7.26／交友館前庭）

今年も七月二五・二六日の一泊二日で合同ゼミを行なった。今年の相手方は東京大学農学部藤田夏樹教授のゼミであるが、テーマの関係上同大学東洋文化研究所の原洋之介教授も参加された。

藤田ゼミも私のゼミも、ともにアジア発展途上国問題、ODA、環境問題、食糧問題などを課題としているため藤田ゼミに今年の合同ゼミの相手方になって頂いたものである。実は毎年大学セミナー・ハウスにお世話になり、同じような合同ゼミを行なってきている。学生たちは初めて会う先生の前で報告するのに緊張するらしく、また限られたスケジュールに従って報告し、討論する際には大きな刺激をうけるので非常に効果がある。同じ課題を扱っても違ったアプローチがなされるのを発見したりする。そして新しい友人をつくる。

ゼミは藤田教授と私が話し合って、日程と双方一人ずつの世話係を決めることから始まるが内容は全て世話係が相談して決め、私どもも教員側はタッチしない。今回の場合でいうと、藤田ゼミから三本、私のゼミから二本の報告があった。私ども教員側は少なくとも一本は二日目の午前中になされると考えていた。しかし、コンパを一日目の八時からということにし、五本の報告を全て一日目に終了させてしまった。そのため、二日目は教員側が話をさせられる羽目となった。

緑に囲まれたセミナー室の環境もよいが、交友館でのコンパは圧巻である。私はセミナー・ハウスがこのような交友の場を用意された見識に今回も感銘を新たにした。学生達が夜の更けるのも忘れ、今朝会ったばかりの新しい友人と学問を語り、大学生活を語っているのをみるのは、ゼミ担当者の大きな喜びである。恐らく七月二五日の新鮮な刺激は学生達の一生の想い出となるであろう。

昨年までは合同ゼミでセミナー・ハウスにお世話になるのは秋の紅葉の頃であった。今年は皆に時間的余裕のある七月末を選んだ。しかし緑の多いためか、暑さも十分に耐えられるものであった。自然は有難いものである。

セミナーが繰り広げられた。主な集会には、17回目を迎えた日豪合同セミナー、ハウスで4度目の日韓学生会議（左掲写真）、久々に迎えた日本国際連合学生連盟の全国セミナー（前頁写真）などがあり、東京工業高等専門学校が招へいする韓国専門大学の研修生ら25名は今年もハウスで9泊した。

ペンシルベニア大学建築学科の大学院生たちは、今夏も「建築セミナー」（新日本建築家協会主催）のワークショップで日本の若い建築家たちに合流し、一つの構築物のデザインから、丸太・縄を使っての建設までの共同作業で汗を流した（表紙に写真）。なお、使用後ハウスに寄贈された丸太計50本は、生け垣の支柱やベンチ、さらには工事用の足場など、この丘の随所で有効に活用させていただいている。

日韓学生会議　8月初旬に48名が5泊した。主要なプログラムは分科会討議で、会場の中央セミナー館では日本側3名、韓国側3名、ボランティア通訳2名の計8名が1組となって、6つのテーブルを囲んだ。このほかに野外研修や文化紹介などでも交流を深めた。'85年に学生の呼びかけで発足した同会議は、以後両国で開催されて今年で11回目。ハウスでの東京大会は4年ぶり4度目である。

●最長の個人利用、そして数々の出会い

千人会員の小西悟先生（東京都立大学名誉教授・ドイツ文学）が「研究と執筆」のため教師館や記念館に6月中旬から8月はじめにかけて計44泊された。「個人利用」としては開館以来の最長記録である。そして、その間仕事の合間に、在泊の他グループの方々やハウス職員との数々の出会いと交流を楽しまれた。日本女子大学附属高校の「高校生活研究セミナー」はこの夏の合宿で30周年（通算54回）。10周年、20周年に続く三株目の記念樹は元学長・上代たの先生ゆかりの白雲木。この丘の自然をこよなく愛する小西先生は、この植樹式に立ち合われ（8頁に写真）、それがきっかけとなり同セミナーでお話しをされた。大妻女子大学の佐野博敏先生（ハウス理事長）のゼミや恵泉女学園短期大学の「国際」セミナーにも招かれた。食事のテーブルで同先生と同席し、心かよい合う機会を得た利用者も少なくない。

ハウスならではの〝コミュニティの生活〟、そして安らぎの雑木林散策で心身をリフレッシュされた先生は、執筆のお仕事（その成果は近くNHKライブラリー『現代に生きるファウスト』として上梓される）が山を越した頃から、「三十年近く忘れていた詩を書く楽しみ」を再発見されたという。ハウスでの7週間の「滞在報告」代りにと残された数篇の詩のなかから、先生のお許しを得て、「出会い」を紹介させていただいた（8頁）。

私の国際交流

留学前に仲間づくりを

―夏季短期留学の事前オリエンテーション―

成蹊大学国際交流センター　松尾　隆

成蹊大学には五つの短期留学プログラムがあります。学生たちが充分に楽しめて、無事帰国できるようアレンジするのが私の仕事です。もちろん勉強もしてきてほしいのですが、せっかく高いお金を払って外国に行くのだから、机にかじりついてばかりいないで外国の街の雰囲気や様子を見てきたり現地の学生との「飲みニュケーション」をとったりもしてきてほしいと思っています。

ただし、最低限知っておかなければならない現地の事情、文化や習慣の違い、海外旅行初心者の学生でも比較的安全に行動できる方法、手段を学生達に知ってもらわなければなりません。そのためには、学生個人が知識や知恵を習得することも然ることながら、学生間のコミュニケーションが絶対に必要となります。

同じプログラムに参加する学生のなかで気が合う学生が一人でも見つかればプログラムが楽しいものになることは請け合いなのですが、学内の学生とはいえたまたま同じプログラムに参加することになっただけの全く知らない学生同士では、心もとないことでしょう。出発前に少しでも学生間のコミュニケーションがとれたらいい、と思います。「友だちになりなさい」などと言うつもりは更々ありませんが、一緒に参加する学生がどういう学生かくらいは知っておいてほしい、と思います。その結果として、いい「仲間」が見つかればいい、と思っています。少しでも知った者ができれば、ひとりで参加しているよりずっと気楽にプログラムをこなし、何と言っても無事に帰国することができ、学内で話ができる学生が増えるからです。

しかし、あまり「気恥ずかしい」「わざとらしい」仕掛けをする気など私はありません。自然体でオリエンテーションを進めてゆき、学生同士が自然体でコミュニケーションがとれるようになったら、と考えています。短期留学先で学んだことは確かに貴重なものですが、いずれ記憶は曖昧になるものです。しかし、コミュニケーションがうまくとれた「仲間」は長く続くでしょう。

目下、私の楽しみは彼らの帰国後、吉祥寺の安い居酒屋で、彼ら彼女らの土産話や自慢話、失敗談を聞くことです。これもあと何年楽しみとすることができるか、年齢とともに話についていけなくなるか、説教臭くなり学生から煙たがられるのではないか、目下のところ心配でもあります。

以上の理由から、このプログラムでは八王子の大学セミナー・ハウスで、出発一ヶ月前にオリエンテーション合宿を行なうのが通例となっています。

6月中旬の同じ週末、北京大学組（26名）とゴンザガ大学組（17名）がともに事前研修で1泊した――最前列左端が松尾隆氏（'96.6.15／ようこそ広場）

利用状況

'96年6月～8月
＊＝同月2回利用
日帰りを除く

■6月（49グループ、延三、一三四人）

東京学芸大学助教授　佐野　秀樹
東京学芸大学障害児教育学科3年
桜美林大学教授　大木　昭男
東京工業大学教授　矢野　眞和
東京都立大学建築学科新入生オリエンテーション
中央大学国際交流センター
アイセック法政大学委員会
桜美林大学教授　上坂　昇
東京学芸大学助教授　伊藤　友彦
杏林大学新入職員フォローアップ研修
東京都立大学教育学研究室
アイセック青山学院大学委員会
共立女子大学総合講座「社会と女性」
共立女子大学教授　入江　和生
慶応義塾大学教授　笠井　昭次
立教大学助教授　上田　信
立教大学教授＊　栗原　彬
東京学芸大学B類英語科
駒沢大学教授　小野　浩一
東京学芸大学助教授　松岡　榮志
日本大学教授　郷司　亮
成蹊大学北京大学短期留学事前研修
成蹊大学ゴンザガ大学短期留学事前研修
中央大学学生相談室
東京経済大学教授　板垣　雄三
明治学院大学教授＊　宮野　彬
千葉商科大学体育会本部フレッシュマンキャンプ
東海大学教授　師岡　孝次
中央大学第Ⅰ経済学部ゼミナール連合会
学習院大学教授　管　忠義
明治学院大学教授　リチャード・ヤング
帝京山梨看護専門学校　池上　明哉
東洋英和女学院大学教授　逸見　謙三
目黒星美学園小学校教員研修
日本女子大学附属高等学校
全日本学生吹奏楽連盟
日中友好雄鷹会
第24回十大学合同セミナー
首都圏ファンタジーグループ研究会
第17回日豪合同セミナー
ルソール合奏団
市民フォーラム2001
ハート&カラー色彩学校／ヒューマン・ライフセンター／薬日本堂／農村環境整備センター
〈個人利用〉
V研究会　吉本　昌司
東京都立大学名誉教授　小西　悟

■7月（70グループ、延二、七七八人）

駒沢大学助教授　谷敷　正光
国際基督教大学心理学サマーセミナー
中央大学教授　田中　拓男
大妻女子大学教授　佐野　博敏
東京学芸大学英語科新入生合宿研修
東京都立大学教授　柳沢　治
駒沢大学教授　森　武麿
早稲田大学教授　島田　征夫
中央大学教授　西海　真樹
恵泉女学園短期大学英文学科総合科目「国際」
中央大学教授＊　金原　左門
中央大学教授　渥美　東洋
東京大学助教授　瀬地山　角
東京大学教授　稲上　毅
日本大学助教授　関根二三夫
中央大学エクス・マルセイユ第Ⅲ大学短期留学研修会
東京工業大学教授　橋爪大三郎
千葉大学教授　菅原　憲二
東京大学教授　平野　敏右
慶応義塾大学助教授　中込　昌孝
横浜国立大学現代企業研究会
慶応義塾大学教授　池上　明哉
東洋英和女学院大学教授　逸見　謙三
東京都立大学精密機械工学科新入生ガイダンス
東洋英和女学院大学教授　増田　弘
立教大学教授　庄司　洋子
立教大学教授　栗原　彬
立教大学助教授　秋田喜代美
駒沢大学ワークショップグループ
成蹊大学教授　宇野　重昭
東京都立大学教授　宮川　彰
明治学院大学助教授　山田　晋
東京経済大学助教授　横畑　知己
東京工業高等専門学校韓国専門大学研修生
東京学芸大学D類数学科
東京大学教授　見田　宗介
早稲田大学教授　伊東　孝之
東京YWCA専門学校社会福祉科
静岡県立大学教授　淵本　康方
埼玉県立朝霞高等学校
福井工業大学教授　芳野　赳夫
山梨学院大学助教授　布川　玲子
産能大学教授　根来　龍之
第15回大学院共同セミナー
東京私立学校保健研究会
生物物理若手の会第36回夏の学校
関東学生オリエンテーリング連盟
日本精神科看護技術協会
日本ワイルド協会
ウイング
大阪からだとこころの出会いの会
国際教育交流協会
PARC自由学校
地球市民アカデミア
新日本建築家協会関東甲信越支部
世田谷区教育委員会
文学教育研究者集団
国分カウンセリング研究会
カントルム青山
私立中学高等学校スクールカウンセリング研究会
薬日本堂／NTTビジネス・ソリューション／JA東京共済連／松本デイベート研究所
〈個人利用〉
V研究会　吉本　昌司
吉野歯科医院　佐野　明子
東京都立大学名誉教授　小西　悟

■8月（77グループ、延五、四六二人）

一橋大学教授　加藤　哲郎
一橋大学教授　安丸　良夫
一橋大学保健管理センター
お茶の水女子大学教授　富田　守
日本女子大学教授　多田　狷介
東京都立大学助教授　山川　仁
アイセック慶応義塾大学委員会
明治大学教授　原　道生
中央大学教授　西海　真樹
法政大学助教授　尾川　浩一
東京理科大学元教授　大沢綱一郎
成蹊大学エディンバラ大学短期留学事前研修
東京大学教授　中兼和津次
東京学芸大学教授　並河　一道
成蹊大学教授　秋松　雅子
東京学芸大学AITC　山口　和孝
埼玉大学教授　中央大学通信教育部
明星大学通信教育部
横浜国立大学助教授　垣内　隆
中央大学教授　田崎　研三
中央大学講師　木下　徳明
東京大学教授　鴨　武彦
立教大学教授　冨安　敬二
専修大学レクリエーションの会
東京薬科大学生活協同組合組織部
日本大学教授　佐藤　誠
東京学芸大学講師　投野由紀夫
東京理科大学教授　狩野　紀昭
都留文科大学教授　畑　潤
東京都立青梅東高等学校
東京都立玉川高等学校演劇部
十文字学園女子短期大学箏曲部
神奈川県立津久井高等学校演劇部
東京神学大学公開夜間神学講座
佼成学園高等学校数学研究同好会
岐阜大学大学院連合獣医学研究科
COSTA夏合宿
第11回日韓学生会議
数論セミナー
第19回光通信研究会
日本国際連合学生連盟
人間関係ワークショップ・リユニオン
FORUM寺子屋
八王子栄光教会
文学教育研究者集団
若者の聖書集会
朝日カルチャーセンター
アジア民間交流ぐるーぷ
相模原キリスト教会
現代教育研究会
ライフミニストリーズ
世田谷市民大学政治ゼミ
大久保無教会集会
インターハート人間教育研究会
奇術クラブマジック・エコー
東京都医療社会事業協会
キリストの教会伝道学院
世田谷区教育委員会
社会医学技術学院
荻窪栄光教会
境南教会
多摩なでしこ会
朝日カルチャーセンター・横浜
数学工房
青山心理臨床教育センター
八南作文の会
東京都教職員組合渋谷支部
国際交流サービス協会／全国農業協同組合中央会／バイオックス／ドラコン／日本分光／国際商事法研究所／ムービング
〈個人利用〉

セミナー・ハウス　1996年10月25日発行（年4回）　第144号
発行＝財団法人　大学セミナー・ハウス
〒192-03 東京都八王子市下柚木1987
TEL0426-76-8511　FAX0426-76-1220
振替口座　00150-1-74590
発行人＝岡　宏子
編集＝大学セミナー・ハウス企画室
制作＝中央公論事業出版
SEMINAR HOUSE
The Quarterly Journal of Inter-University Seminar House
1996, No.144

開催予告

●第23回国際学生セミナー●

転換期の世界
－アジアにおける日米関係－

1996年11月22～24日（金～日の2泊3日）

世界は今、急速に変化している。この数年間に起こったことは、40、50年前にはまったく予想できなかった。冷戦が終焉した後、パックス・アメリカーナの世界も新たな世界秩序を求めて変化しつつある。過去の大きな歴史的な流れを踏まえて、将来の世界を展望してみることは意義のあることだ。日米関係は今後の世界の動向を左右するほど重要な2国間関係である。同時にアジア太平洋地域は経済的にもっともダイナミックな発展を遂げている地域である。今回は特にこの日米関係を中心に、次のような視点から討論したい。

■分科会のテーマと講師

A．歴史から読み解く日米関係の21世紀像
中央大学法学部教授　滝田賢治氏※
神田外語大学外国語学部助教授　高杉忠明氏

B．「イメージから見た」アジアにおける日米関係
桜美林大学国際学部教授　上坂　昇氏※
時事通信社解説委員　金重　紘氏

C．台湾海峡クライシスと日米関係
日本大学国際関係学部教授　宇佐美滋氏
筑波大学社会科学系助教授　井尻秀憲氏

D．アメリカの政権交代の視点から見た日米関係
聖心女子大学文学部教授　関場誓子氏※
南山大学法学部教授　菊池　努氏

E．U.S-Japan Relations in the context of Regionalism
（英語で討論する）
筑波大学社会工学系教授　佐藤英夫氏※
国際大学日米関係研究所研究員　信田智人氏

※印は運営委員

定員：100名（内留学生30名）/申込締切：11月8日/対象：大学生および社会人/会費：12,000円（社会人15,000円）/留学生にはスカラーシップがあります。

●第171回大学共同セミナー●

絶滅論

1996年12月7～8日（土～日の1泊2日）

環境問題、資源・エネルギー問題、あるいは人口問題、食糧問題など我々の眼前には多くの難問が山積みされている。これら地球規模の問題を従来の人文・社会科学的枠組みの中でのみ論じるのでは十分ではない。少なくとも地球システムの歴史という時間スケールで問題を認識し、分析し、議論することが必要だ。それをより具体的にいえば絶滅の歴史を探求することであり、その本質は環境との相互作用の解明にある。

■主題講演

東京大学理学部助教授　松井孝典氏

■シンポジウム

1．生物の絶滅パターンとその原因
静岡大学教育学部助教授　河田雅圭氏

2．人類の進化
－生物的および非生物的要素との関係
京都大学霊長類研究所助手　内田亮子氏

3．地球環境と人類の生存と消滅
東海大学情報技術センター所長　坂田俊文氏

［運営委員］　東京大学理学部助教授　松井孝典氏
専修大学法学部教授　長谷川真理子氏

定員：70名/申込締切：11月27日/対象：大学生および社会人/会費：8,500円（社会人10,000円）

●問い合わせ先
大学セミナー・ハウス企画室
TEL. 0426-76-8532
FAX. 0426-76-0266

●館長室から●

東京都立大学名誉教授　小西　悟
V研究会　吉本　昌司

汗ばんだ翌日はブルブルで一枚の重ね着…。変り身の烈しい陽気に適応する人の体の仕組みと、その心のメカニズムに及ぼす作用を考えてみたりもするこの頃です。

七月から、大学教員研修会、大学院共同セミナー、次いで大学教員懇談会。このあと国際学生セミナーと共同セミナーが続くというわけで、池田室長はじめ企画室の面々と共々、「大わらわ」の日々が続いています。でもこの忙しさ、実は企画室のスタッフにとっては大変な「頭と心」の栄養（自覚すると否とに拘わらず）となっているのです。

何しろ、各企画委員の先生方は選りすぐったその道の専門家、企画会議でポンポンととび出す発想やそれへの応酬の小気味よさ、各領域の最新情報に「ソーカ」とうなずいている途端、とんでもない方向に話題は拡がり、その結果、テーマもそして最高の講師もきまっていく。当日繰り拡げられる議論、夜半に及ぶ歓談にもおつきあいしながら、その度毎に新たな興奮で頭も心も揺り動かされる次第。私の老化が遅れ気味なのも、こんな日々のせいかと思いなおし、忙しさをのりこえています。

ただ、薄の穂や地にこぼれる紅柴の萩の風情を楽しむ時間もほしいと思うのは欲ばりでしょうか。（岡）

表紙の写真＝「建築セミナー'96」（新日本建築家協会）での日米の若い建築家たちによる〈丸太交流〉。（「業務通信」9～10頁参照）